
ネギま！ ～至りし者魔法ある世界へ～

フィリス・E・O・ナイトスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ ～至りし者魔法ある世界へ～

【Nコード】

N0348U

【作者名】

フィリス・E・O・ナイトスター

【あらすじ】

恋姫の世界を生き抜いた天伎零。その零が『ネギま！』の世界に神の娯楽の為に介入！？

プロローグ（前書き）

フィリスです。恋姫の方もありますが、つい衝動的に書いてしまいました。

かなりのチートになっていますが、そのようなものに否定的ではない方はお楽しみください。

誤字脱字も多く駄文だと思いますが、温かい目で見てください。

プロローグ

この小説では初めまして、天伎零あまのぎれいだ。とのんきに挨拶しているが俺ももう九十歳となり、今にも永眠しそうだ。

愛する者たちも一年ほど前に死に、俺は自室で横になっていて周りには俺の子や孫たちがいる。

俺はそんな中、幸せに包まれて息を引き取った。

……はずだった。

「ん、この空間は……」

何で俺はまたここにいるんだ？

「久しぶりじゃの」

「お久しぶりです」

「ん、あんたたちは確か……天照大神と駄神？」

「わしの名も「ええ、合ってますよ」ちょっと待たんか!？」

「そうか、合つてて良かった」

「わしスルー!？」

「「黙れ駄神」」

「ひどい！」

あゝあ、落ち込んだよ。

「で、どうして俺はここに？」

「この駄神が他の神と一緒に貴方の人生を覗いていたの。それで面白がったこの駄神が娯楽の為に他の世界にも送ろうと言ったのよ」

「あんの、駄神が……」

碌なことしないな。

「それで貴方を呼んだことに気付いた私が来たってわけです」

「俺はもうこのまま死にたいんだが」

「ここに呼ばれたからにはもう無理よ。まあ、いいじゃない。強さも十分だから、貴方を神にする許可は出てるし」

「そうはいつでもな、俺はあいつらのいない世界で過ごすのは嫌だぞ」

「それなら大丈夫です。よほど強く思ってたんですね、魂が半ば融合してましたよ。今は分離させて、肉体を再構成しています。

果てしもない時間はかかると思っけど、ちゃんと行きかえらしてあげるわよ。神にはできないけど、不老不死にはしておくわ」

「そっか、それならまあいいや」

「わし復活！というわけでこのカードを5枚引けい！」

「何だそれは」

「ボーナスというやつじゃ。引いた特典をつけてやろうぞ」

「んじゃこれとこれと……これとこれとこれだな」

「ふむ、まず一つ目は、お主が最初に貰った特典に魔法関係を加えることじゃな。それと肉体の限界突破。それと鬼巫女 능력 とスperlじゃ」

「えつと、『あらゆる干渉を否定し我を通す程度 능력 』だよな」

「そうじゃ。残り二つなんじゃがいい方と悪い方先にどっちを聞く」

「いい方で」

「分かったぞ。いくつか制限は付くが『ありとあらゆるものを操る程度 능력 』じゃ」

「それ何てチート？で、制限っていうのは？」

「まず、鬼巫女としての 능력 を十分使えるようにならんと使えん。それと 능력 を操って自分の 능력 を増やすことはできんし、

命を生き返らせることはその世界を担当している閻魔に会わんと無理じゃ。まあ、簡単な概念位なら操れるがな。人の心も操れん。

せいぜい話の流れを操るくらいまでじゃ。それも自分に好意を齎すような方向には操れん。それに操るだけではできんこともあるぞ。

例えばここでは心を操れるとしよう。しかし心は操れても心を読むことはできんじやろ？そういうことじゃ」

「できないこともあるってことか。で、悪い方は？」

「お主の原作知識の一部消去じゃ」

「まあ、別に今貰った能力があればいけると思うけど、一部ってどういうことだ？」

「こんな人いたなあ、とかこんな場所あったなあぐらいは覚えておるが、こんな歴史の流れだったなあとか、その人物についての未来などは消去される。せいぜい原作があと何年で何処が舞台かわかる程度じゃ」

「まあ、その程度ならいいか」

「じゃあ、天照殿。頼むぞい」

「あんたはやっぱりできないんだな」

「はい、終わりましたよ」

「で、次はどの世界に行くんだ？まあ、聞いても詳しい事はもう分らんがな」

「『ネギま！』の世界ですよ」

「えっと、子供の先生と麻帆良ってところは分かる」

「まあ、その前に貴方の基点世界に行って修行してもらいます」

「その基点世界って言うのは何だ？」

「基点世界というのはこの駄神にとつてのこの世界のように、その神が侵入を許さなければ他のどんな神も侵入できない世界です。駄神が送る世界とはいっても貴方は行き来できますし、基点世界の人物も時間制限付きで呼びこむことができます。

また、物語の終焉を迎えると基点世界へと戻されます。その時、送った先の世界で親密な関係となった者は基点世界に連れていくことができます」

「へー。ということは天照はこの神の許可をもらってるのか」

「ええ」

「で、基点世界ってのはどこもこんな世界なのか？」

「いえ、このように他の者がいない基点世界も珍しいです。私も他の者と関わりを持たないだけで生物は存在していますし。

そうですね、貴方の基点世界は東方projectの世界を元にしたものとしましょうか。まあ、その世界の天照と私は無関係ですが」

「自分で作らなくていいのか？」

「ええ。大抵の新しい神は上位の神に基点世界を与えてもらって、その世界で修業を積むのが普通ですから。ちなみにいつでも私たちの名前を呼べば連絡をとれますよ。

基点世界から私たちが送る世界に跳ばされても、跳ばされた時間軸に跳べばタイムロス無しで行き来することができます」

「了解。つつてもその世界も幻想郷つてのしか覚えてねえけど」

「それが当たり前です。今肉体を再構成してる者たちも、終わり次第基点世界に送ります。それでは良い神生じんせいを」

「おっ」

そうして初めて転生した時と同じく、俺の意識は闇に沈んでいった。

プロローグ（後書き）

プロローグ終了しました。

おそらく東方の世界での修行の話は別の小説として、一段落したらになると思います。その時はwikiのお世話になりそうですが……

でもISも書きたいし……と色々思ってしまう今日この頃です。

次回の更新をお待ちください。

e p . ? (前書き)

フィリスです。 e p . ? を更新しました。

() で囲んだ文字は念話、『 』 は能力、魔法名、操ったもの、道具の名前などです。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください。

鬼神兵を巨兵と書いていたので修正しました。

スペルカードルールから弾幕ごっこに修正しました。

e p . ?

＼零 side＼

魔法世界のとある森の空間が突然裂けた。

「うーん、いつ開始なのかと思ってたけどやっとか……って縮んでる!？」

どういうことだ!？俺の姿は20歳で固定だったはずなのに。

(あゝ、聞こえる?)

(天照か。どうなってんだ、これ?)

(知識がない貴方に教えておくと原作の20年前、大分裂戦争中の魔法世界よ。貴方の姿は3〜4歳ってところかしらね)

(なんでそんなことを?)

(その方が面白いからって駄神がね)

(……あの野郎)

(まあ、いつ成長を止めればいいかは教えるわ)

(了解)

俺は基点世界で何億年も過ごした。それこそやがて月人と呼ばれる

者たちが地球にいることから、幻想郷ができ何百年も経つまでだ。

おかげで貰った『ありとあらゆるものを操る程度の能力』も使えるようになったし、愛した者たちの肉体の再構成も終わって、共に過ごしていた。

ちなみに魔法の知識はあったので、この世界の技術らしい本契約を八雲紫と済ましている。

人間だったところからの付き合いだった彼女たちと揉めたが、弾幕ごっこで紫が勝ったので文句も言えなくなった。

まあ、その後に仮契約を結ばされたけどな。というか本契約の相手を選ぶための仮契約のはずなのに何でできたのかいまだに不思議だ。そして、俺の魔法適性は、水、氷、風、雷、火、光、闇だ。まあ、パチュリーと同じ『火＋水＋木＋金＋土＋日＋月を操る程度の能力』を使えば、地の系統も使えるんだけどな。

まあ、基点世界でのことはまた別の話だ。ちなみに、俺のカードのローマ数字は1、色調は銀と虹、徳性は信仰、星辰性は恒星天、方位は中央、

称号は『最強にして最凶にして最恐の幻想』、アーティファクトは『幻想の絆』だ。この『幻想の絆』は自分と自分の従者に咸卦法を使っているのと同じ効果を付与し、

心を通い合わせ、お互いが何を思い、何をするかがわかるようにするものにし、能力も共有できるというものだ。さすがに同じ世界にいますという縛りはあるが。

まあ、能力が能力だし仕方ないのかなあ。と、そんなことを考えていると、遠くにでかい鬼のようなものが見えた。確か鬼神兵だった

な。とりあえず近寄ってみるか。

そう思い俺は空を飛んでいく。こんなこと魔力や神力などを操れば簡単にできる。

＼side end＼

＼??? side＼

俺は紅き翼のリーダー、ナギ・スプリングフィールドだ。今俺たちは王都を強襲している帝国軍から黄昏の姫御子を守ろうと急いでやってきたところだ。

いくら完全魔法無効化能力があるとはいえこんなガキまで戦争に連れ出さなきゃなんねえのが気に食わねえ。

「ナギ、あれを！」

「あ？どうした、アル……ってなんであんな小せえガキが！？」

「わかりません。ですが早く助けて差し上げないとやばいですよ」

その瞬間、帝国軍はそのガキに気付いたのか、鬼神兵で狙いやがった。詠唱が間に合わねえ！俺はあのガキを助けられないのか！そう思ったその時、ガキがいきなりでかい技を放って鬼神兵の上半分を消失させた。

＼side end＼

＼零 side＼

俺が空を飛んできると、鬼神兵がいきなり俺を狙ってきやがった。あんまめんどい事はしたくないんだがなあ。そう思いつつ俺は魔理沙の得意とする魔法をぶっ放す。

「恋符『マスタースパーク』！」

……やべえ、上半分が消し飛んだよ。

「おい、そのガキ！大丈夫か？」

お前の方がガキだ……ってそうだった。今俺若返ってるんだったん、こいつ確か原作にいたような気がするぞ？確かナギだったか。

「今のどこに怪我する要素があるんだ？」

「はっ、ガキが言うじゃねえか！」

帝国軍もやつと立ち直ったのか俺を狙って攻めてくる。面倒だし、一気に消すか。

俺は制限により、フランと同じ『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』自体は使えない。

しかしあれは打撃による破壊活動ではなく、全てのものにある力を加えれば破壊できる『目』があり、離れた目を自分の手の中に移動させ強く握ることで破壊してしまう能力だ。

ならば俺の眼の『波長』を操って『目』を見えるようにし、『目』を操って手の中に移動させてやればいい。

これができるようになるのは時間がかかったができるようにはなかった。

俺はそうして自分の手の中に全ての鬼神兵の『目』を移動させる。

「きゅっとしてドカーン！」

その言葉と『目』を握りつぶす。するとそのごとくが爆破された。

「戦闘終了っ」と

すると、ナギ？が話しかけてきた。

「お前強いな！俺はナギって言うんだ。俺の仲間になんねえか？」

「ナギ、何を言ってるんだ！いくら強いとはいえこんな小さい子を……」

やっぱ、ナギだったか。つゝか俺を勧誘したのか、コイツ？

「俺は自分より弱い者の下に着く気はない」

「何だとしてめえ！そんなこと言うならこれを受けてみやがれ！」

うわ、沸点低っ！というか『雷の暴風』なんか撃ってきやがった。まあ、このぐらいなら大丈夫なんだが。

俺は『魔法を発動させている精霊』と『発動させるために使った魔力』を操ってナギの魔法を無効化する。

「な！？」

「弱すぎるよ。それはこう使った。『雷の暴風』」

俺はナギに向かってだいぶ手加減した『雷の暴風』を放つ。それは
いともたやすく障壁を破り、ナギに直撃した。

「じゃあな」

俺は『視力』を操り一番近くの大きな都市を探す。

「……ま……て。お……前は何て言うんだ？」

俺は称号と共に名だけを名乗る。

「『最強にして最凶にして最恐の幻想』、零だ」

そうして俺は見つけた都市に向かって『距離』を操って移動した。

side end

e p . ? (後書き)

e p . ? 終了しました。

こちらの話ではタグについていない、ネギま！が東方以外の技が出てきた場合に技の説明をします。

次回の更新をお待ちください。

e p・? (前書き)

フィリスです。パソコンが使用不能になり、携帯からの投稿になります。使用可能になるまで更新速度が落ちると思いますが、ご容赦ください。e p・?を更新しました。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください。

e p . ?

〔零 side〕

俺はナギを倒した後、色々な戦場に介入していた。連合の味方をしたり、帝国の味方をしたり、時には両方とも殲滅したりしていた。能力も使ったりしたので、色々な二つ名がついた。『幻想神』というのはいいい。あながち間違いないや無いからな。だけど『ねえ、バグなの！？』とか『俺、生きて帰れたら結婚するんだ……』って何！？俺は死亡フラグだって言いたいのか！？

まあ、過ぎたことを悩んでもしょうがないか。……『幻想神』って言い易いな。これからはそう名乗ろつと。本当は基点世界で呼ばれてる『操神』って名乗りたいけど。つか、流れを操って情報を集めたら裏で糸を引いている組織の存在を知った。何でも『完全なる世界』^{コスモエンテレケイア}というらしい。その内叩き潰しにいくか。そうこう考えてる内に、俺は目的地であるグレートブリッジに着いた。

「おゝやってるね」

俺の目の前では連合と帝国が戦っている。

「んじゃ、今日は両方とも叩き潰すとするか」

俺は光を操って自分の周りを迂回するようにねじ曲げて擬似的な透明人間になり、両軍の中間まで飛んでいって、呪文を詠唱し始めた。

「ノクト・シュヴァルツ・ウイング・ロード。契約に従い、我に従え、漆黒の王。来れ、無より生まれし原初の闇。闇より暗き深淵よ

り出で来る其は、科学の光が落とす影なり。『黒神くろかみの左腕さわん』！」

俺の魔法で両軍の兵が次々と死んでいく。

「おい！」

「ん？」

「こないだはよくもやりやがったな！」

「おいおいナギ。お前こんなガキにやられたのかよ」

「うっせーよ、ラカン！」

「侮ってはいけませんよ、ラカン。この子が有名な『幻想神』なのですから」

「はっ、どうせ噂なんてデタラメだろ。行くぜっ！」

そう言つてラカンが襲い掛かってくる。まあ子供の姿になつてはいるが、別に力は弱くなつてゐるわけじゃないし平気か。俺は溜息を吐きながらラカンの拳を受け止める。

「なっ！？」

「熾撃『大鵬墜撃拳』」

俺の攻撃に耐えられなかったのか、ラカンは飛んでいく。その瞬間、俺の左側から氣を感じた。

「神鳴流奥義、『斬空閃』！」

集めた情報から判断すると詠春という奴だと思われる剣士が突っ込んでくる。神鳴流の技だからおそらくそうだろう。俺は『境界』を操り『スキマ』から『穹』を取り出して抜刀する。

「こつやつてるのか？『斬空閃』」

『斬空閃』のやり方は知っていたが、さもその場で見取ったかのようには振る舞う。俺の放った『斬空閃』は相手の『斬空閃』を切り裂き詠春に当たる。とりあえず切れはしなかったが、戦闘不能になったようだ。そして俺は残り、ナギとおそらくゼクトとアルビレオだと思われる奴らを倒そうと呪文を詠唱する。

「ノクト・シュヴァルツ・ウイング・ロード。契約に従い、我に従え、純白の王。来れ、無より生まれし原初の光。闇より深き深淵より出で来る其は、科学の幻影かげを裁く剣なり。『白神しろかみの右腕うで』！」

残りの3人も俺が放った魔法により気絶する。

「もっと強くなれ。そうすれば、一撃くらい当てられるかもね」

正直言つて、俺は強くなりすぎた。これに神としての力を使うと勝つのは絶望的になる。俺を神にした天照大神が『与奪を支配する力』を持っていたように、駄神が『自然を支配する力』を持っていたように、俺は『未来と固有空間を支配する力』を持っている。『未来支配』は全ての可能宇宙・多元宇宙の未来を支配することにより相手の行動を先読みすることができるものであり、『固有空間の支配』は相手が作り出した固有領域を言語化してその空間を支配するものである。こんなの勝てる奴いるのかねえ？

ま、いつか。取りあえず集めた情報の中に「こんな奴原作にいたな」って感じがする奴のとこに行こう。俺は『スキマ』を開き、ウエスペルタティア王国の王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアのもとへ向かった。

＼side end＼

＼アリカ side＼

「はあ……」

今起こっている戦争のことを思うと溜息がでる。私も調停役となり戦争を終わらせようとしたが無理じゃった。どうもこの戦争はどこか怪しいところがある。まるでわざと長引かせようとしているみたいじゃ。そんなことを考え再び溜息を吐きそうになったそのとき、私の目の前の空間が割れた。

＼side end＼

＼零 side＼

ようやくアリカ王女が見つかったのでその目の前に『スキマ』を開くと、目を見開き今にも叫びそう……ってやばい！今の俺って不法侵入者じゃねえか！俺は急いで『アリカ王女の声帯』を操り声が出ないようにした。

「……………！？」

驚いてるな。とりあえず落ち着かせるか。

「まあ、落ち着け。別に俺はあんたを殺しに来たわけじゃない。あんたが盤上の駒なのかそうじゃないのか、確かめに来たただけだ。」

俺がそう言うと一緒に目の色が変わった。……話はできそうだな。能力を解除したことを分かり易いようフィンガースナップで伝えてやる。

「主^{ぬし}が『幻想神』か？一体何をしたのじゃ？」

「1つ目の質問については肯定。2つ目の秘密だ」

「なら、この戦争は裏で糸を引いている者があるのか？」

やっぱり気付いてたか。及第点だな。

「ああ、いるぞ」

さて、ここでどういう反応を見せるのかな？

「……ならば私に力を貸してはくれんか？」

「王女としての命令にしないでいいのか？」

「私が今そんなことを言える立場でないことくらいわかっておるわ」

……へえ。

「俺は自分より下の奴に従うつもりは無い。あんたは何を持ってそれを示すんだ？」

「私は未来のこの国の女王となる身じゃ。故に私は強さ等ではなく、王となる者の才覚と振る舞いで示そう」

そう返すか……。

「あんたは強くはない。けどあんたの言う通りあんたに必要なのはそれだ。そしてあんたは自分の立場が分かるだけの判断力を持つてるし、歴史や伝統を重んじる国にしては珍しい人に頼み込むということが出来る。十二分に合格だ。俺の力を貸そうじゃないか。俺のことは零と呼んでくれ」

「わかった。して、零よ。裏で糸を引いているのは誰なのじゃ？」

「完全なる世界という組織。世界を終わらせるのが目的だ。連合や帝国の上層部は勿論、このウェスペルタティアにもシンパがいる」

「そうか。ならば紅き翼に会いにいくぞ」

「なんで？あいつら弱いぞ？」

「それは主に比べたらじゃろ？それに数は多くて困ることはないしの」

「有ると思うぞ？フレンドリーファイヤーとか」

「当てぬ腕くらいあるじゃろうに……」

「まあ、そうなんだけどな。んじゃ紅き翼に連絡よろしく。俺は護衛としてついて行くよ」

「ふむ、それならマクギル元老院議員殿かの」

そしてその5日後、俺とアリカ王女は紅き翼に会いに向かった。

） s i d e e n d （

e p . ? (後書き)

e p . ? 終了しました。

今回出てきた技はこちらです。

- ・ 黒神の左腕：オリジナルの闇属性の超広範囲殲滅魔法。自分から半径2？以内の任意の座標から半径100フィートの範囲に超重力を発生させ、動きを止めた所を闇で呑み込む。大抵の者は超重力により圧死し、闇に吞まれれば二度と戻れない。使用者の力量により、対象の選択が可能。

- ・ 白神の右腕：オリジナルの光属性の超広範囲殲滅魔法。使用者の前方に特大の斬撃を模した光をいくつも飛ばす。その光は物理的、魔法的防壁を素通りし、果ては異空間にいる対象まで攻撃を加えられる。使用者の力量により、対象の選択が可能。

次回の更新をお待ちください。

e p . ? (前書き)

遅くなりました、フィリスです。 e p . ?を更新しました。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください。

e p . ?

ナギ side

俺たちは今ガトウに呼ばれて連合の首都に来ている。

「何だよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「会って欲しい人がいる。協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

マクギルのおっさんが示した方を見ると、こちらに2人歩いてくるのが見えた。

「ウェスペルタティア王国アリカ王女と、その護衛の零殿だ」

「なっ、てめえ！ 何でここにいやがる！」

ラカンが騒ぐのもつともだ。なぜならそこには、この前俺たちが負けた『幻想神』がいたんだからな。

side end

（零 side）

はあ、会った瞬間罵倒してくるとか馬鹿なのか……って馬鹿だからこんなことすんのか。……ん、この気配は。

「姫さん、交渉は任せた。俺は周りを見てる」

（それと俺の家名は言つなよ）

（なぜじゃ？）

（大人になった時に騒がれたくない。零だけだったならそう珍しい名前じゃないからな）

「あつ、手前何処に行きやがる！」

「お前は馬鹿か、筋肉野郎。周りを見てくるって言っただろうが」
そう言い放ち、気配の主の下まで飛んで行く。

「やあ、初めましてかな？ 『幻想神』」

「そう言うお前は確か造物主ライフメーカーの人形ブリームムの一番目だったか？」

「……君は何故、いや何処まで知っているんだい？」

「ん？ お前らがこの火星に作られた世界を無に帰そうとしている事位だが？」

「……君は危険だ。ここで消させてもらうよ」

「はっ、できるものならやってみな」

そう言つて、一番目が魔法を使おうとしたところに俺は『マスタースパーク』を何本も打ち込む。

「くっ！」

「これで終わりだ、魔砲『ファイナルスパーク』」

『ファイナルスパーク』は一番目に直撃し、煙に包まれる。

「はぁ、はぁ。今のは危なかったよ。今日の所はひとまず退散させてもらおうしよう」

「そうかい」

そして一番目は転移して逃げていった。さて、俺も戻るとするか。

「終わったか？ 姫さん」

「うむ。して零よ、お主はどこに行つておつたのじゃ？」

「今し方『完全なる世界』の幹部と闘つて撃退したところ」

「そうであつたか。零よ、とりあえず戻るぞ」

「了解」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

あれからしばらく経って、俺とアリカ王女は帝国の第三皇女と話し合ったために会合場所まで来ていた。『紅き翼』はこないだアリカ王女がお忍びでナギと出かけたときに見つけた証拠を^{ブラエトル}法務官に提出しに行っている。

「私がウェスペルタイア王国王女、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアじゃ」

「妾はテオドラじゃ。で、そっちの子供は誰なんじゃ？」

「『幻想神』零だ」

「なっ、こんな子供がじゃと!？」

「お前も子供だろう」

「テオドラ皇女、話を進めてもよろしいか？」

「う、うむ。して、『完全なる世界』というのがこの戦争を裏で操っているというのは本当なのか？」

「そつだ。今も5人ほど此处にいるな」

俺がそう言つと3人が護衛を殺し始め、2人がアリカ王女とテオドラを攫おうとしてきた。俺は『スキマ』でテオドラを近くに移動させる。

「『操神結界・開幕』」

俺が張る結界の中でも最弱の物を展開する。

「何だ、近づけないぞ!？」

「『魔法の射手、闇の5矢』」

俺は敵が戸惑っている内に『魔法の射手』を放って殺す。それと同じに『流れ』を操って、情報を集める。

「さて、姫さん。どうするんだ？ ナギ達の方も『完全なる世界』に嵌められた様だぞ」

「ならば、夜の迷宮に行くぞ。あの中は魔法が使えんからの」

「了解。ナギには連絡をしておく。で、テオドラ。お前は一緒に来るのか？」

「妾を呼び捨てにするな!」

「五月蠅い。で、どうするんだ？ このままだとまた攫われそうになるぞ」

「むう、しょうがない。ならば案内するのじゃ」

「へいへい」

俺は『スキマ』を開いて夜の迷宮に移動する。

「うむ、流石は『幻想神』、夜の迷宮でも力を使えるか」

「当たり前だ。さて、『紅き翼』が来たら起こしてくれ」

「分かった」

- - - - -

「零、起きよ」

「ん、来たのか。で、何処に向かうんだ？」

「タルシス大陸極西部のオリンポス山に有る隠れ家だそうだ」

「了解。なら、他の奴を呼んでくれ。一気に移動する」

「うむ」

そして皆が揃い、俺は全員を『スキマ』で飲み込む。

「な、一気に転移しやがった！」

「正確には『空間の境界』を操っているんだけどな」

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！　どんな所かと思えば掘立小屋ではないか！」

「当たり前だろ、こいつらは逃亡者なんだから」

「我が騎士よ」

「『我が騎士』って何だよ、姫さん」

「連合の兵ではなくなったのじゃろ。ならば私のものと言うことだ。零から世界全てが敵だということは聞いた。じゃが、主と主の『紅き翼』は零を除けば無敵なのじゃろ？」

「あのなあ、そういう時は『零を除けば』何ていわないでくれるか？」

「事実じゃ、諦める。まあ、例え世界全てが敵でもこちらは最強の8人なのじゃ。ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ。そして零よ、これから私に力を貸してくれ」

「やれやれ、おっかない姫さんだ。いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

「姫さん、あんたが王としての器を俺に見せ続ける限り、あんたに力を貸すことを『幻想神』の名の下に誓おう」

そうして、俺達の反撃が始まった。

e p . ? (後書き)

e p . ?、終了しました。

今回出てきた技はこちらです。

・操神結界・開幕……オリジナルの結界。開幕と言うのは結界の分類。開幕<本章<終焉の順に強度が上がっていく。開幕は魔法的、物理的の二重結界。

次回の更新をお待ちください。

e p . ? (前書き)

フィリスです。 e p . ?を更新しました。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください。

e p . ?

反撃を開始して4カ月、俺たちは墓守り人の宮殿で最終決戦を始めようとしていた。

「さて、いっちょやりますか」

「だな、零。それにしても不気味なくらい静かだな」

「舐めてんだろつよ、俺達のことを」

「ナギ殿！ 帝国・連合アリアドネー混成部隊、準備完了しました！」

「おう、分かった」

「それですね、ナギ殿。それと零殿も。サ、サインをお願いできないでしょうか？」

「おお？ ああ、それ位いつでもいいぜ」

「そ、尊敬していました」

「俺もいいが、そんな浮ついた気持ちだと死ぬぞ。戦争するのはそういうもんだ」

「は、はい！」

「タイムリミットだ、ナギ。正規軍の説得は間に合わない。すぐに

始めよう」

外には大量の召喚魔か。よし、俺が行くか。

「ナギ、外は俺に任せてお前は姫御子を助けに行け」

「ああ、分かった。でもどうやって道を開けるんだ？」

「どれ位倒せるかは分からないが、俺の選定の技を使う。残った奴は俺が叩き潰すし、後から湧いてきた奴は混成部隊に叩かせる」

そして俺は部隊の少し前に浮かぶ。

「必然『キングクリームゾン』」

俺が技を放つと同時にほぼ全ての召喚魔が死んでいく。残ったのは1体だけか。資格がない奴らが多過ぎだろ。残ってるのは感じる力的に公爵級だろう。

「おい、零。何したんだ？ もう1体位しか残ってないんだが」

「時間を十数秒消し去って即死攻撃を喰らったと言う結果を残しただけだ」

「さ、流石バグキャラ」

「早く行つて来い。俺はあいつの相手をするから」

そう言い残し、俺は『スキマ』で召喚魔の前に移動する。

「……貴様、何者だ」

「これから死ぬ奴に教える名前はねえよ」

「貴様、我を魔王サタンと知つての狼藉か！」

「知らねえし、どうだっていい」

「死ね、小僧！」

「お前がな、『黒神の左腕』、『白神の右腕』、術式統合『機械仕掛けの神』デウス・エクス・マキナ」

魔法を発動させると幾つもの腕が現れる。そして、その腕がサタンに触れた瞬間、サタンの体が半透明になり砂が溢れこぼ落ちる様に崩れていく。

「我に何をした！」

「死ぬがいい、魔王よ。混成部隊の奴ら、後は任せた。俺はナギ達の方に行く」

俺が『スキマ』を使って移動するとナギ達が血だらけになって倒れていた。

「何があつた？」

「造物主の攻撃を喰らってしまったのですよ」

「あんな雑魚にか」

「ほう、大口を叩くではないか。この鍵を見ても同じ事を言えるかな？」

「それがどうした」

「この鍵はある神話に出てくる宝具を改造した物なのだ。その宝具とは銀の鍵。連なる時空の門を開けられる私には触れることすら叶わんぞ」

「それはどうかな？」

俺は縮地で近づき造物主を殴り飛ばす。

「何故私に触れられる！」

「俺もその鍵と同じようなことができるからな。同じ存在なら触れられるんだよ」

「なっ、人がそんなことできる筈なろう！」

「事実を認めろ。魔神『死狂い』」

「私を倒すか人間。それもよからうッ！私を倒し英雄となれ。羊達の慰めともなろう。だが努^{ゆめ}忘れるな。最善の解など無い。私の語る永遠こそが唯一の次善解なのだ」

「ごちやごちや五月蠅いんだよ！ 絶望『鮮血の結末』！」

「ぐおおおおっ！」

「造物主。例えお前が世界を造れようが幻想^{おれ}には敵わない」

俺の放った攻撃が治まると光球が生まれ大きくなり始める。

「儀式は完成済みだったか。つとあれは」

「全艦艇、光球を取り囲み押さえ込め！ 魔導兵团、大規模反転封印術式展開！ 全力を尽くすのだ！」

ま、これにて一件落着……とはいかないんだろうな。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

造物主との戦いが終わって、結論から言うと世界は救われた。そして今はその表彰式だ。俺は参加せずに遠くから眺めてるんだけどな。

「我が騎士ナギよ、よくぞ世界を救ってくれたな」

「ま、零に助けられた部分も多いけどな」

「そう言うでない。確かにお前は世界を救ったのだからな。ところでその零はどこに行ったのじゃ？」

「ああ、あいつなら『俺は表彰されなくてやった訳じゃない。称号ももらない』って言うってたぜ」

ぶっちゃけ『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』って元老院に都合のいい駒にしか思えないしな。

「ん？ 大気中の魔力が減少してるな。……なるほど、あの術式にはこんなデメリットがあったのか」

さて、オスティアの中心はどのあたりか。俺は直ぐ様それを調べ『スキマ』で向かう。到着してしばらくすると、オスティアの崩落が始まった。

（おゝい、姫s、じゃなかった。女王さん。）

（何じゃ零！ 今忙しいのじゃ！）

（おいおい、忘れたのかよ。俺は魔法が使えない空間でも能力ちからを使えるんだぜ）

（まさかお主！）

（じゃ、移動させるぜ）

俺は靈力を放出してまだ残っている民達の居場所を特定、『スキマ』で安全なところまで移動させる。

（これでもう大丈夫だろう。じゃあな）

（待て、零よ！）

俺はアリカ女王の制止を無視して『スキマ』を開く。……旧世界にでも行くか。

- - - - -

- - - - -

え、旧世界に来たのはいいが、俺の目の前では少女とそれを追いかけてまわしてる大人達へんたいがいる。

「おい、変態共、止まれ」

「ああ？　つて『幻想神』殿！　私は変態ではありません！」

「少女を追いかけてまわしているのに説得力がないぞ」

「少女は少女でもそいつは真祖の吸血鬼なんですよ！」

「それが？」

「それがって言われても、吸血鬼は悪なんですよ！」

「何で？」

「血を吸うからですよ！」

「それはただの食事。俺達が野菜や肉、魚を食べると変わらない」

「そ、それに人も殺していますし！」

「お前はただ食事をしたただけなのに命を狙われても反撃しないのか？」

「う、うう」

「はい、時間切れ」

俺は『スキマ』を開いてそいつらを遠くに移動させる。

「大丈夫だったか？」

そう少女に尋ねるが返事は返ってこない。

「おい、聞いてるか？」

「お」

「お？」

「お前、私のモノになれ！」

いきなりの過激発言！？

く吸血鬼 sideく

ちっ、今日は付いていない。魔力がほとんど残っていない時に襲撃されるとは。

「おい、変態共、止まれ」

ん、あいつは誰だ？

「ああ？ って『幻想神』殿！ 私は変態ではありません！」

『幻想神』って……こいつがか！？ もっといかつい奴だと思って

いたな。

「少女を追いかけてまわしているのに説得力がないぞ」

……なぜあいつは私の味方をしているんだ？　もしかして私を知らないのか？

「少女は少女でもそいつは真祖の吸血鬼ですよ！」

そうだ、私は真祖の吸血鬼なのだ。それを知ればこいつだって敵

「それが？」

え？

「それがって言われても、吸血鬼は悪ですよ！」

「何で？」

は？

「血を吸うからですよ！」

「それはただの食事。俺達が野菜や肉、魚を食べると変わらない」
な。

「そ、それに人も殺していますし！」

「お前はただ食事をしただけなのに命を狙われても反撃しないのか

「？」

何が起こっているんだ！？

「う、うう」

「はい、時間切れ」

こいつ馬鹿なのか？

「大丈夫だったか？」

こいつは真祖の吸血鬼になって、初めて私に存在を肯定してくれた。なぜだか私はこいつの傍にいたいと思っている。こいつなら強さも問題ないし、私の従者にも相応しい。そうと決まれば！

「おい、聞いてるか？」

「お」

「お？」

「お前、私のモノになれ！」

絶対にお前を手に入れる！

side out

何でもこの少女はエヴァンジェリンと言うらしく、吸血鬼になって初めて存在を肯定してくれた俺と一緒にいたいのだとか。そういや、

こんな奴原作にいた気がする。

「とりあえず断る」

「何故だ！」

「いや、お前子供だし」

「お前の方が子供だろう！ それに私はこつ見えても600年以上生きてるんだぞ！」

俺は億単位で生きています。

「とりあえず」

「？」

「逃げる！」

「あ、ちよつと待て！」

俺は『スキマ』を使ってなるべく遠くに逃げた。

- - - - -

エヴァンジェリンと初めて会ってから2年、魔法世界に行くと、今日アリカ女王が処刑されるらしい。いつものように情報を集めると、元老院に嵌められたことが分かった。

「とりあえず助けに行きますか」

俺が『スキマ』を開いてケルベラス溪谷の谷底に向かうと、ナギがアリカ女王を横抱きにしていた。

「れ、零！？　今まで何してたんだよ！」

「お主、何処から！？」

「悪い、女王さんが処刑されるの今日知った。今までエヴァンジェリンに追われててな。魔法世界で紛争地域で活動してても、エヴァンジェリンばかり気にしてた」

俺は2人と話しながら曲絃糸を張り巡らせる。

「ま、とりあえずこれは雇い主のアフターケアみたいなモンだと思っ
ておいてくれ」

言い終わると同時に、張り巡らせた糸で魔獣の首を落としていく。

「じゃあな。縁があつたらまた会おうぜ」

俺は『スキマ』の中に入って次に何をするか考える。

「1人で旅すんのに飽きたしな。かと言ってエヴァンジェリンと一緒に
は嫌だし……そうだ！」

俺は一つの考えに思い至り実行するために『スキマ』から出た。

e p . ? (後書き)

e p . ?、終了しました。

零は『スキマ』を多用しすぎている気がしますね。

今回出てきた技はこちらです。

・機械仕掛けの神……幾つもの腕が現れ、触れたものの存在を否定し、消滅させる。

次回の更新をお待ちください

e p . ? (前書き)

フィリスです。 e p . ?を更新しました。

ネギまの方の筆が進むので連投です。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください。

e p . ?

俺は考えを実行するために、開けた土地と近くに森がある海岸沿いに来ていた。俺が今から俺が行うのは、サーヴァント召喚とサモン・サーヴァントを複合させた従者の召喚と、仮契約とコントラクト・サーヴァントを複合させた魔力パスの形成だ。

「我が名は天伎零。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、使い魔を召還せよ。素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我、『操神』天伎零。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「
Anfang^{たて}」

「
告げる」

「
告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「
誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来れ、天秤の守り手よ！」

呪文を唱え終わった瞬間、魔法陣の上に2つの魔法陣が展開される。

「サーヴァント、セイバー（ファニーヴァンプ）。召喚に応じ（応じて）参上した（したわ）。……問おう（一つ聞くけれど）、貴方が私のマスターか（かしら）」

「って、何故（何で）私以外のサーヴァントがいるのですか（いるのよ）！」「

「まあ、聖杯戦争と関係ない召喚だからな、これ」

「「どういことですか（よ）！」「

「その説明は後だ。雰囲気からしてお前は吸血鬼だろ？ とりあえず吸血衝動を無くしてっ」と

『あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力』を発動して吸血衝動を消し去る。長年使うことで理解したんだが、『あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力』は無理が通れば道理が引つ込むの究極形ともいえる物だった。要するに無理（我）が通れば道理（干渉）が引つ込むってことだ。

「何馬鹿なことを言っても、本当に無くなった！？」

「それで人を襲う心配はないだろ」

そう言った瞬間近くの空間が歪みだし、様々なサーヴァントが出てきた。

「何故召喚もされていないのにこんなにサーヴァントが！」

「おそらく世界がお前達を取り返しに来たんだろ？ お前達はサー

ヴァントなんだから」

「それに私は真祖の姫だしね」

「真祖の姫？ まあ、それはおいおい聞くとしてとりあえずあいつらを倒しますか」

「一応手伝いましょうか？」

「いや、いい。まだ完璧に魔力パスを繋いだ訳じゃないしな」

「そうなの？」

「ああ、いろんな魔術や魔法の体系を混ぜたからな。それにお前達のマスターである俺の強さを見極めるいい機会だろ？」

俺はそう言って神力の封印を外す。封印はこの世界に来て直ぐに力を隠すために行った。封印を解いたのは、おそらく向こうはクラスに縛られていないだろうからだ。そして封印が解かれると俺の姿に変化が起こった。

「マスターの体が大きくなった？」

「それは違う。元々この姿だったんだがとある理由で子供の姿になっていただけでこれが本来の姿だ。それとお前達、俺の名前は天伎零だ。ちゃんと名前で呼んでくれ」

さて、戦闘開始と行きますか。

「まずはこれからだ。必然『キングクリムゾン』！」

その攻撃で死ぬとまではいかないまでも、ほとんどのサーヴァントが行動不能にまで追い込まれた。残った奴らの情報を集めると、残りはギルガメッシュ、ヘラクレス、エミヤ、クー・フリーン、イスカンダル、呂布位か。呂布と言えば、恋を思い出すが、どうやら別人のようだ。

「何をしたかは知らんが、このイスカンダルが倒してやろう！」

イスカンダルがそう言うのと急に神牛が牽くチャリオットが現れる。ふむ、『神威の車輪』^{ゴルディアス・ホイール}と言うのか。

「『遙かなる蹂躞制覇』！^{ヴァイア・エクスプグナティオ}！」

物々しい技名がついてるからどんな攻撃かと思えば、ただの突撃かよ！

「氣、魔力、靈力、妖力、神力。合成、『太極法』」

強化した腕で突撃を受け止め、イスカンダルと『神威の車輪』の『目』を移動させる。

「きゅっとしてドカーン」

その言葉と共にイスカンダルと『神威の車輪』は爆発する。

「その心臓、貰い受ける！『刺し穿つ死棘の槍』^{ゲイ・ボルク}！」

俺の心臓へ放たれた刺突を左手の人差し指と中指だけで受け止める。

「な、因果はきちんと逆転されていた筈だぞ！」

「俺の能力の1つ、『ありとあらゆるものを操る程度の能力』。この能力で『因果』を操らせてもらった」

俺は『スキマ』から穹と溟を取り出し、クー・フリーンの首を刎ねる。

「So as I pray, unlimited blade works」

その瞬間、世界が塗り替えられる。

「ご覧の通り、貴様が挑むは無限の剣。剣戟の極地！ 恐れずして掛かって来い！」

「『リアリティ・マープル 固有結界』か。ならば俺はその世界すら支配しよう」

俺が手を握り込むと、『固有結界』が音を立てて壊れる。

「『固有空間の支配』。これもまた、俺の能力の1つだ」

「下がっている、錬鉄の英雄よ！」

「『射殺す百頭』！」

対人用の『射殺す百頭』^{ナインライフス}が放たれるが、穹と溟を超高速で動かし、全てを受け流す。

「『溟穹一閃』！」

数多の殺しの概念を持つ穹と溟に『太極法』と同じ強化をして繰り出される斬撃がヘラクレスを襲う。

「……よもや、たった1度の攻撃で全ての命を失う日が来ようとは」

「トレース解析、オン開始。なつ、解析ができないだ」と！

「当たり前だ。俺が神になる前、人だった時からずっと一緒に戦ってきた武器だ。あいぼう既に神器へと至っている物を、英雄程度が解析できる筈がない」

そのまま縮地で近づき、首を刎ね飛ばす。

「『エルキドゥ天の鎖』！」

その言葉と共に、俺の体が鎖に縛られる。

「自分が神であることをばらしたことが運の尽きだ、雑種！」

「『ゴッド・フォース軍神五兵』！」

拘束されている俺の不意を突こうとしたのか、呂布が後ろから攻撃を仕掛けてくる。俺は穹を回転させ『エルキドゥ天の鎖』を断ち切り、拘束を解いて反転、方天画戟ごと呂布を切り捨てる。

「『あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力』と『未来の支配』。未来を知る俺に不意打ちは効かないし、抑止力ですら俺を縛ることはできない」

「ちつ、『天地乖離す開闢の星』！」
エヌマ・エリシュ

世界からのバックアップを受けているのか直ぐ様『天地乖離す開闢の星』エヌマ・エリシュを打ち込んでくるギルガメツシュ。

「『操神結界・本章』」

俺は中程度の結界を張り、その攻撃を防ぐ。

「絶望『鮮血の結末』」

紅き雷が幾つも降り注ぎ、行動不能になっていたサーヴァントごとギルガメツシュを殺し尽くす。

「英雄達よ。例えお前達が伝説になろうが幻想には敵わない」

そして俺は再度神力に封印を施し、呆けている2人の下に向かった。

「呆けている所に悪いが、契約を済まさせてもらうぞ。我が名は天伎零。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。仮契約」

俺は少し浮かんで2人に口付けする。

「ーッ！」

あ、2人とも真っ赤になった。

「いきなり何をするんですか（するのよ）！」

「契約を完了させたただけだが？」

「あ、本当ね。魔力パスがさっきより強力になってるわ」

「ええ、そうですね。ですが、許可なく口付けをするのは頂けませんか」

「そりゃ、悪かったな。はい、これがお前等の仮契約カードだ、アルトリア・ペンドラゴン、アルクエイド・ブリュンスタッド。と言うかペンドラゴンってことはセイバーはアーサー王か？」

「何で私の名前を！？」

「アルトリアだっけ？ よく見なさい。今渡されたカードに名前が書いてるわ」

「あ」

「ところでアルクエイドに1つ質問だ。真祖の姫って何なんだ？」

「私は真祖の吸血鬼なのよ。それに私はアリストテレス、タイプ・ムーンの転生先の最有力候補だから姫なんて言われているのよ」

「アリストテレスとかは放っておくとして、真祖の吸血鬼ってのは吸血鬼の弱点が無くなった吸血鬼だったか？」

「何それ？ 真祖の吸血鬼って言うのは人間に対して直接的な自衛手段を持たない星が、人間を律するために生み出した『自然との調停者』、『星の触覚』。人を律するものならば人を雛形に言うことで精神構造・肉体共に人間の形をしているけど、分類上は受肉し

た自然霊・精霊にあたるものよ。星からのバックアップも受けられるしね。まあ、私は太陽の光位なら大丈夫だけど」

「そうか。ならバックアップを受けられるまま星からの命令を聞かなくていいようにして、吸血鬼の弱点を無くしておくか」

俺は能力を発動して『概念』を書き換える。

「よし、終了。なら次は2人の質問を聞こう。ちなみに令呪は無いぞ」

「どう言うことですか？」

「術式を変えた時にいらなから無くした。攻撃されても平気なのはさっきのでわかっただろ？」

「ええ、そうね。なら、さっき吸血衝動を無くしたのと弱点を無くしたの。何をやったの？」

「俺の能力を使ったんだ。俺は『あらゆる干渉を否定』できるからな。それでこうしたいと言う『我を通』したんだ」

「なら次は私が。このカードは何なのですか？」

「それは仮契約カードと言って従者に与えられるものだ。効果としては従者との魔力供給、俺の場合は供給の強化だな。それと至近距離での召喚。まあ、これは必要ないな。効果がありそうなのは、衣装の登録、防御力上昇。それとアーティファクトだな」

「アーティファクトとは？」

「魔法道具、そっちの世界だと多分魔術礼装だったかな。それと似たようなもんだ」

「なら、最後。零は何者？」

「俺はお前達の世界でもこの世界でもない世界の神。『操神』天伎零だ」

「そう、分かったわ。でも、まださっきのキスのことが残っているわよ」

「え？」

「そうですね。無理やり唇を奪ったんです。それについてはどうお考えですか？」

「え、えーと。と、とりあえず、アーティファクトの確認をしようか」

「逃げたわね」

「逃げましたね」

「いいからカード貸して！」

アルトリア・ペンドラゴン

数字？

色調 金

徳性 正義

星辰性 流星

方位 中央

称号 甦りし騎士王

アーティファクト 選定の鞘

アルクエイド・ブリュンスタッド

数字 ？

色調 虹

徳性 希望

星辰性 地球

方位 中央

称号 原初の一

アーティファクト 世界の代行者

「何か凄いな。って、どうした？ アルトリア」

「いえ。ただ選定の剣である『勝利すべき黄金の剣』^{カリバーン}は既に失われていますから」

「もしかして『全て遠き理想郷』^{アヴァロン}もか？」

「はい」

「よし、ならさっきの償いに俺が用意しよう」

「え？」

「『全ての干渉を否定し、無くなりし存在を有へ』」

すると俺の手の中に剣と鞘が現れる。ついでにアーティファクトの情報も集めるか。

「なっ、これは！」

「はい、どうぞ。オリジナルと全く劣っていない筈だ」

「ありがとうございます！」

「それとそのアーティファクトの効力は『勝利すべき黄金の剣』を出している時に限り、あらゆる力を吸収し、自分の力にする物らしい。それとアルクエイドの方は星からだけでなく世界からもバックアップを受けられるようになるらしい。呼び出すときは『来たれ』、しまうときは『去れ』だ」

「「分かりました（分かったわ）」」

「それで、2人は何で聖杯戦争に？」

「私はただ星の触角として過ごしてただけよ」

「私は……」

「ん、どうした？」

「私は、聖杯に選定のやり直しを願おうとしてたんです」

「そりゃ、何でまたそんなことを」

「私が王にならなければもつといい未来が待っていた筈なんです！」

「そんな訳がねえだろ」

「ッ！」

「選定の剣に選ばれた時点でお前が王として1番相応しかつたってことだ。それによ、俺も人だった頃に王みたいな立場にいたことがあったがそんなことは1度も思わなかった。だって、失礼だろうが、自分が殺した奴にも、自分の指示で死んだ奴にもさ。第一お前は英雄として今も語り継がれているんだ。少なくとも周りの奴らはお前のことを認めてるんだよ」

「……私がやったことは、無駄じゃなかったのですか？」

「ああ。決して無駄なんかじゃなかったんだよ」

「くっ、うっ」

そして、アルトリアは泣き始めた。今まで背負ってきた憑き物を一緒に流すかのように。しばらくするとアルトリアは泣き疲れたのか眠ってしまった。

「あゝあ、私空気がったなゝ」

「うっ！」

「まだ何もお礼を貰ってないのになゝ」

「うゝ、あ、そうだ。なら俺の血を吸っていいぞ。知り合いの吸血鬼によると結構美味しいらしいからな」

「いいの？ 零が死徒になっちゃうけど」

「俺の能力があるから大丈夫だ」

「あ、そつか。じゃあ、遠慮なく。いっただつきまゝす」

そう言っただけ俺の頸筋に噛みつくアルクエイド。その状態で3分ほど経過して、ようやく口を離してくれた。

「何これ、すごく美味しい！ 病み付きになりそうゝ！」

「そつか、そりゃ良かった。っと、起きたか？ アルトリア」

「ええ、ありがとうございました」

「いや、いいよ。何せ大切な従者^{かぞく}だからな」

「か、家族ですか!？」

「ん？ ああ。この場合の家族ってのは俺の大事な奴らってことだ」

「そ、そうですか」

「何か落ち込んでないか？」

「い、いえ、別に何でもないです!」

「そ、そうか」

いきなり元気になったな、おい。

「ねえ、零。私は?」

「お前ももう家族だよ、アルクエイド」

「それならさ、もっと砕けた呼び方で呼んでよ」

「それじゃあ、アルク。これからよろしくな！ 後、リアもよろしく!」

「リ、リアですか!？」

「駄目だったか？」

「い、いえそんなことはありません。よろしくお願いします。ね、零」

「おう！」

ドオオオオン！

「何だ？」

「森の方から聞こえましたね。行ってみましょう！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

しばらく進んでいると森の一角が燃えているのが分かった。

「おい、いたぞ！」

「見る！ ガキだ！」

「こりゃいいや、上玉だぜ」

「ガキの角は柔らかいってんで、また高値がつくんだよなあ」

「まったく、下種な人達ですね」

「本当。思わず殺したくなっちゃうわ」

「お前達、誰だ！」

「誰？ 俺は『幻想神』だよ」

「な、何でこんなところに英雄がいるんだよ」

「とりあえず、報いを受けようか」

俺は『大地』を操って、全員の心臓を貫く。

「大丈夫だったか？ 嬢ちゃん」

「え？」

「とりあえず聞くが生き残りは他にいるか？」

「……（フルフル）」

「しょうがない。なら一緒に来るか孤児院に行くか、どっちかを選べ」

「……一緒に行く」

「そうか、名前は？」

「……ブリジット」

「そっか。俺は天伎零。こっちはアルトリアとアルクェイド。よろしくな、ブリジット」

「……うん」

「じゃあとりあえず旧世界に行くぞ」

「旧世界ですか？」

「ああ、2人は知らなかったな。ここは魔法世界と言って、火星に造られた人造世界なんだよ。それに対して地球が旧世界と呼ばれてるんだ」

「……亜人は、何故か旧世界にいけないから無理です」

「大丈夫、俺の手にかかれば亜人でも旧世界にいける。まあ、もちろん『認識阻害』の魔法は使っけどな」

俺は『現実と幻想の境界』を操って、ブリジットを現実の存在にする。

「それじゃあ、旧世界に行くぞ！」

俺は全員の下に『スキマ』を開き、旧世界に向かう。…ああ、旧世界に行ったら全員の戸籍を作らないとな。

そして物語は加速する。

e p . ? (後書き)

e p . ?、終了しました。

今回は零の従者召喚の話でした。それに加え、零無双。今回からタ
グにF a t e が加わったので、その説明も省きます。

今回出てきた技はこちらです。

・我が名は〴〵守り手よ！……虚無の属性がある世界のサモン・サー
ヴァントにF a t e のサーヴァント召喚を繋げただけ。

・太極法……咸卦法の最上強化版。他にも氣、魔力、神力が靈力、
妖力、神力で行う四象法ししやう、氣、魔力、靈力、妖力で行う両儀法があ
る。強化の具合は咸卦<四象<両儀<太極の順。

・溟穹一閃……数多の戦いの中で竜殺し等の殺しの概念全てが付与
された穹と溟に太極法と同じ強化を行い斬撃を繰り出す。これが零
の真名解放に当たる。

・操神結界・本章……対物・対魔結界を交互に4重張り、中にいる
者を回復させる。

・我が名は〴〵仮契約……これも虚無の属性のある世界のコントラク
ト・サーヴァントに仮契約の文字を加えただけ。

次回の更新をお待ちください。

i n t e r v a l . ? (前書き)

フィリスです。i n t e r v a l . ?を更新しました。

今回は幕間と言っ感じ です。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てく
ださい。

i n t e r v a l . ?

今私はあり得ない光景を目にしています。私の前で神を名乗るお爺さんが土下座しているんです。

「本っ当に、すまなかった!」

「えーと、何がですか?」

「お主は本来、死ぬ運命になかったのじゃよ」

ああ、よく零君が読んでいた転生モノと言うもののテンプレですね。つてあれ?

「私の死因は自殺だったと思うのですが?」

「ああ、そうじゃ。儂自身、お主には何の失敗もしておらん。じゃが、お主が自殺する切欠を作ったのが儂なんじゃよ」

私が自殺した切欠って……

「零君に何かしたんですか!」

「う、うむ。それはの」「この駄神がスカートめくりをしようとして起こした風で看板が飛んで天伎零は死んだのですよ」「天照!」

いきなり現れたこの女性は誰でしょうか? まあ、今はそれより。

「どう言うことですか、駄神?」

「いきなり駄神!？」

「貴方なんて駄神で十分です。で、零君はどうなったんですか？」

「ええ、責任を持って転生させました」

「じゃが、人が誤って死んだことで他の者の運命まで狂うとは思わなかったんじゃないよ。それで責任を取ってお主も転生させることになったんじゃない」

「なら零君のいる世界をお願いします」

「残念ですが、それは無理なんです」

「何ですか？」

「私たちには『を元にした世界』と言う大きなくりなら送れるけど、『がいる世界』と言うピンポイントでは送れないの。それにそっちの世界とは時間の流れる速さが違うから零殿は今神になって、色々な世界に行く仕事をしているのよ。だから私自身念話ができるけれど特定の世界には送れないわ」

「そう、ですか」

「ならば基点世界に転生させればいいんじゃない！ 儂天才！」

「基点世界には転生者は送れないでしょうが、駄神」

「あ、そうじゃった」

「まあ、そう言う訳で貴方には特典をいくつか差し上げて転生してもらいます。それでも、貴方は直接の被害者ではないから2つ程しか上げられないんだけどね」

うゝん、２つか。１つは決まりとしてもう一つは何にしよう。……あ、そう言えば零君が「こんなのがあったら凄い」って言ったのがあったつけ。

「じゃあ、まず一つ。どんな家庭に転生しても、絶対に生き延びられる力をください」

「ええ、分かりました。で、もう1つは？」

「え〜っと、Fateとか言うんだっけな。そのスキルの強化版の『直感：A+』をください」

「はい、これで完了です」

「そう言えば私ってどこの世界に転生するんですか？」

「えーっと、ネギまの世界ですね」

良かった。零君に借りてよく読んでたから、どんなことが起きるか分かるよ。

「それでは、良い人生を」

— — — — —

そんなことがあつて転生したのはいいけど、まさか主人公^{ネギ}の双子の妹にだなんて。でも、私の直感が囁いてる。零君にまた会えるって、もしかしてこの世界に来るのかな？

「シズク、あんたはどっちだと思ふの！」

「お父さんは来てくれるよね！」

あ、シズクっていうのは私の名前です。転生前の名前と一緒に嬉し
いですね。

「兄さんには悪いですけど死んだら会えないと思いますよ」

「ほら見なさい、シズクだってこう言ってるじゃない！」

「お父さんは来てくれるもん」

まあ、来てくれるでしょうね、死んでませんし。

「まあ、いいわ。はいこれ。ネギとシズクにあげるわ」

「これは？」

「初心者用の練習杖ですよ、兄さん」

「そ。あんた達も来年から学校来るんでしょう。生きてた頃のお父さんみたいになりたかったら、ちよつとは練習しておきなさい」

ふう、とりあえず隠れて練習してみますか。まあ、兄の奇行を止め

なければいけませんけどね。

- - - - -

どうやら私は火と水、それに治療系の魔法に適性があつたようで、主にそれを練習しています。

「シズク、今日はネカネお姉ちゃんが帰ってくる日だから早く村に戻ろう！」

そうでしたね、ってなら今日が悪魔の襲撃がある日ですか！？

「兄さん、早く戻りますよ！」

「え？ う、うん！」

私は走って村まで行きましたが、どうやら一足遅かったようです。

「ネカネお姉ちゃん！ おじさーん！」

「あ、兄さん！ 何処に行くんですか！」

くっ、兄さんとはぐれてしまいましたか。

「クカカ、また1人発見だ。お前も石になれ！」

ッ！ 兄さんを探すのに夢中で気付きませんでした。しかし、自分の身を守るように突き出した手に魔法が触れた瞬間、魔法が消滅しました。

「これは……魔法無効化能力ですか」

確かにこれがあれば大抵の場合生き残れますね。まあ、飼い殺しにされる確率も上がりましたが。

「な、何をした貴s」

その瞬間、目の前にいた悪魔を魔法が飲み込みました。おそらく今のは『雷の暴風』。なら、父は向こうですか。そう思いしばらく歩いて行くと、父が兄に杖を渡していました。

「お、お前がシズクか。ほんと、俺じゃなくアイツに似たな」

向こうも私に気付いたようです。本当に、私は母に似ていますよね。

「お前には、杖は無いけどこの指輪をやる。杖と同じ位の発動体だ」

「ええ、ありがとうございます、父さん」

「悪いな、お前達には何もしてやれなくて。こんなこと言えた義理じゃねえが、元気に育て。幸せにな!」

「お父さあーん!」

ふう、良質の発動体も手に入ったことですし、次からはもっと高位の魔法の練習をしますか。幸い、兄について行けば禁書は見放題ですからね。

i n t e r v a l . ? (後書き)

i n t e r v a l . ?、終了しました。

他の転生者が現れました。零が転生する前の幼馴染ですけどね。

つい先程、『概念』と『能力』の違いについて、友人に尋ねられました。一応私の解釈では、『概念』は道具や種族が持つ物。『能力』はその個体のみが持つ力というものです。

次回の更新をお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0348u/>

ネギま！ ～至りし者魔法ある世界へ～

2011年10月10日15時17分発行